

かぐらおか

(題字は初代学長 山田守英氏)

第114号

平成15年9月19日

編集 旭川医科大学
教務・厚生委員会
発行 旭川医科大学教務部学生課



藤く (美瑛)

(写真撮影 医学科第6学年学生保護者 田中 眞)

退職を迎えて……………久保 良彦……2	学生等のセクシュアル・ハラスメント相談員が決定……………13
学長に就任して……………八竹 直……3	広報誌「かぐらおか」が本学のホームページに……………14
旭川医科大学に感謝をこめて……………片桐 一……4	「医大祭を終えて」……………松森 友昭……14
退官にあたって……………牧野 勲……5	SARS対策講演会等の開催……………15
副学長に就任して……………塩野 寛……6	課外活動用の製氷器が設置されました……………15
副学長(附属病院長)就任のご挨拶……………石川 睦男……7	博士学位記授与式……………16
図書館長就任あいさつ……………小川 勝洋……8	更衣ロッカー室を物置にしないで……………16
就任ご挨拶……………服部ユカリ……9	患者さんのための音楽による医大祭(室内合奏団)……………16
助教授紹介……………藤田 智……10	外国人留学生夏季オリエンテーション……………17
助教授紹介……………秀毛 範至……10	第50回北海道地区大学体育大会……………17
助教授紹介……………本間 龍也……10	第46回東日本医科学生総合体育大会……………18
卒業生の動向(医学科)……………11	クラブ今昔(女子バスケットボール部)……………18
卒業生の動向(看護学科)……………12	研究室紹介……………19
日本学生陸上競技対校選手権大会……………12	全日本医科学生体育大会(男子バスケットボール部)……………19
全国かるた競技学生選手権大会……………12	教官の異動……………20
クリニカルクラークシップを 少し経験してみても……………箭原 希実……13	窓外……………20



退職を迎えて

第5代学長 久保良彦

本年6月30日で学長職の任期が満了し退職いたしました。振り返ってみますと、旭川医科大学の設置（1973年9月29日）と同時に開設された8講座、9学科目の一つ、外科学第一講座（主任鮫島夏樹教授）の助教授の辞令をいただいたのが同年11月16日でした。従って本学にはほぼ30年の長きに亘ってお世話になったこととなります。この間、実に多くの方々とめぐり会うことができました。

“人生とは常に一定の人々だけが招かれている一つの出会いである。ただその招待は二度と再び繰り返されることはない”（H. カロッサ）

いま私はかけがえのない出会いの数々を思い、深い感慨を覚えております。

「インターン」の時に外科に惹かれた私は外科医の道を選び、北大第2外科に入局しました。2年間の初期研修先となった、当時の国立北海道第2療養所（通称簾舞療養所）では、丁度肺結核の手術療法が最盛期を迎え、多数の手術がおこなわれておりました。そこで私が強く印象づけられたことは、外科手術に最も大切なポイントの一つは血管処理にあるのではないかということでした。

研修出張から医局に帰って2年後に、定年退官された奥田義正教授の後任として着任された杉江三郎教授は世に知られた心臓血管外科学の泰斗でありました。この先生に是非血管外科の手ほどきを受け、第一線で働こうと考えていた私が、その後ミイラ取りがミイラになったように、血行再建あるいはその材料を対象とした臨床研究にどっぷり漬かり、さらにこの間、初期研修で手ほどきを受けた肺結核の外科から肺癌主体の呼吸器外科を手がけるようになったというのが、私の外科医としての個人歴です。どうやら恩師のひとり、杉江三郎先生との出会いが我が道を決定づけた最大の要因であったように思えます。

ところで蛸壺のような狭い世界の中で、己の無知を知らずにそれなりに幸せに終わる予定であった外科医としての私の人生は、1997年7月1日から激しく揺さぶられることになりました。本学の学長職に就き、それまでと全く異なる環境に戸惑う中で、二つの大きな衝撃を受けました。その最

も大きな衝撃はわが国の医学教育の在り様でした。

ご承知のように明治維新後わが国ではそれまでの漢方医学に代わり、ドイツ医学が採り入れられました。その当時のドイツ医学の研究・教育の基本様式がそのままに受け継がれて現在に至っているという思いがしたのです。

もちろん、恥ずかしながら私もその中で過してきた一人で、いかに医学教育に無関心に過して来たかを如実に示すものですが、それだけにその改革を考えるに当たっては、丁度自分が通ってきた方向と正反対の道を辿ればよいことは容易に解りました。

幸い本学教職員の皆様のご理解とすばやい対応によって、teaching から learning へ、タテからヨコへ（カリキュラムの統合化）あるいは体験学習の重視などの改革を実行に移す事ができ、全国的にみても医学教育改革を進める先頭集団の仲間入りができました。

次に受けた大きな衝撃は国立大学の法人化と統合再編の問題でした。いずれも国立大学の構造改革につながることで、とくに前者は学長就任とほぼ時を同じくして提起されました。何かよく解らぬままに、国立大学の独立法人化から民営化まで様々な憶測が飛び交い、果てはどこそこの大学は消えてしまうといったことがまことしやかに囁かれるなど、ある期間全国的に悲愴感のようなものが広がっていたことが思い出されます。

さまざまな紆余曲折があった後、案外すんなり明年4月からの独法化移行が決定されました。そしていま、各大学がその対応に懸命な様子を知るにつけ、矢張りわが国の国立大学は構造改革を受け入れなければならない大きな問題を抱えていたのかと深い感慨を覚えます。もちろん国立大学の法人化は、それ自体が目的ではなく、国立大学が教育、研究という使命をよりよく果たす上での手段であることは申すまでもありません。

終わりに、私が学長在任中念仏のように唱えておりました言葉：“大学は学生のため、病院は患者のため”に在る；を旭川医大の皆様にお贈りし、今後益々のご発展を祈念申し上げます。



学長に就任して

学 長 八 竹 直

この度、久保前学長の後を引き継ぐことになりました。大学の制度上の大変革期に大役をお引き受けすることになり、身の引き締まる思いがしています。

私は初代泌尿器科学講座教授の黒田一秀先生が第2代学長になられたのに伴い、20年前の昭和58年夏に第2代泌尿器科学教授に呼んでいただいたのですが、その私が第6代学長をお引き受けすることになるとは夢にも思いませんでした。黒田元学長の頃も当大学はまだ創設の途上で、難問山積の時期でありましたが、私に巡ってきたこの時期も法人化をひかえ、非常に難しい問題が山積みです。

当面、学長としての私の最大の仕事は現在の制度から、国立大学法人による大学運営に円滑に移行することであると思っています。

国立大学法人法が平成15年7月9日に成立し、運営組織の骨子は見えてきていますが、細部はまだです。しかし本番まで後8ヶ月しかありません。私は「繊細・柔軟且つ迅速」をモットーとしたいと思っていますが、まさに「迅速性」が必要です。

法人化による大学運営の変更点の概略を紹介したいと思います。

まず、大学の正式名称が「国立大学法人旭川医科大学」とやや長くなります。

大学の運営組織が大きく変わります。当大学では学長の他に4人の理事からなる「役員会」を置きます。また主として大学経営を審議する「経営協議会」を設置し、教育、研究についての審議は「教育研究評議会」が行います。理事の1人と経営協議会の半数の委員は学外の有識者をお願いすることになり、経営に透明性を持たせる事が要求されています。

大学運営の経営資金は文部科学省から交付される一定の運営費交付金、附属病院収入、授業料、科学研究補助金や寄付金などです。この中では当

然附属病院収入が一番大きく、附属病院の経営が大学にとって極めて重要になります。

これらの組織のもとに、大学は6年を期限とする「中期目標・中期計画」を作成して文部科学大臣の認可を受け、これに則って運営し、その成果は公的機関によって評価されます。それゆえこれからは常に一步前進した改革・改善が求められます。

しかしこれらはすべて法制度改革による大学内部の問題です。この改革によって大学の本来の任務である教育・研究・診療は更なる向上が求められることとなります。すなわち附属病院では患者さんに対しては今まで以上に安全で高度な医療サービスを提供し、学生教育を充実し、研究もますます高度な成果が得られる努力をして社会貢献を進めねばなりません。

法人化と教育に関してもう少し詳しく述べたいと思います。最も関心があると思われる授業料は、一定の幅で上下させることは可能だと言われます。しかし急に変える事は現実的ではないでしょう。また現在複数のカリキュラムが進行中で、これを継続する必要があります。しかし不都合な部分に関しては、迅速に改善していこうと思っています。授業や実習の改善については授業評価が大切です。そのためには学生からみた授業評価は大きな意味を持っています。教育方法改善に対する重要な意見として、この評価には真剣に対応してほしいと思います。

また来春から新医師卒後臨床研修制度が始まります。まだまだ制度上に不明な部分がありますが、臨床研修センターを中心に、より良い研修が出来るような体制整備をしていこうと思っています。

今大学ならびに大学病院にはここで書ききれない色々な改革・改変の問題が一度に押し寄せてきています。これらの問題を改革しながら走り、走りながら改革していくしかありません。どうぞ旭川医科大学の改革のために協力をお願いします。



旭川医科大学に感謝をこめて

前副学長 片 桐 一

旭川医科大学での教官生活を終え、この度副学長職任期満了で退官しました。この間大過なく過ごせたことは、皆々様の御援助、御協力の賜と感謝しております。

私は、第二病理学講座初代教授板倉克明先生と研究領域（免疫遺伝学、HLA研究）が同じであること等により、1974年に国立がんセンター研究所から旭川医科大学第二病理学講座助教授として赴任しました。1975年基礎研究棟が竣工し、運動場のような研究室に機器が一つずつ運びこまれ、培養細胞を増やしたり、マウスを徐々に増やして研究体制を整える過程は、熱気にあふれ、創設の喜びを皆で分かちあいました。当時は最新の機器で研究を立ち上げましたが、その後の技術革新のうねりは高く、単クローン抗体作製、遺伝子操作動物の作製、HLA遺伝子領域のDNA解析、ペプチド解析のために新しい技術を導入し、そのために次々に新しい研究機器購入に奔走し、現在は創設当時の様子を残さず、21世紀の研究にふさわしい研究室に変身しています。この間、大学内外の研究仲間の御協力を得て新しい研究成果を得ることが出来、免疫学、HLA研究に微力ながら貢献出来たと思っています。病理学教室での研究生生活を終えた教官、大学院生、研究生は、現在それぞれの分野で活躍しており、私が望んでも果たせなかった一流雑誌へ研究成果を掲載する迄成長し、21世紀の医学を背負ってくれることでしょう。

最近7年間は、副学長として大学の運営にたづさわらせていただきました。教育改革に始まり、脳死判定基準作り、道内国立大学との統合基本方針作り、国立大学法人化後の中期目標中期計画案作り等々を手がけ、未だ運用されていないものもありますが、これからの大学運営に何らかの役に立ててもらえればと思っています。特に副学長就任後すぐに教育カリキュラムの全面見直しに取り組み、その良い成果を耳にするようになりました。

年々増加する医学知識、技術への対応、病める人を診れる医療人育成を目指して、入学早期から目的意識を持ち、自ら考えそして問題を解決していきけるような新しいカリキュラムを作り、皆々様の御協力により改革をすすめてまいりました。一昨年「モデル・ユアカリキュラム」が発表され、これは旭川医大のすすめて来た改革方向と殆ど一致するものであり、いち早くこの4月から参加型臨床実習をとり入れ、実践的臨床能力を身につける新しいカリキュラムを発足させました。平成17年3月に新カリキュラムで学んだ学生が巣立ちます。彼等の将来の発展を楽しみに見守っています。

旭川医科大学は平成16年4月に国立から国立大学法人へ移行する明治以来の大変革の時期を迎えています。この激動の時期には、これから活躍していく皆々様の若い力と叡知を結集する新しい体制が必要で、新しい大学形態を組織し、21世紀に活躍する医療人の育成と先端医療の提供に邁進されますことを願っております。

この29年間の大学生活を終えるに際しまして、これ迄研究、教育、大学運営に関わりを持ってくださいました皆々様へ、心から感謝申し上げます。

旭川医科大学の一層の発展を祈念申し上げます。





退官にあたって

前副学長(前病院長) 牧野 勲

私は昭和63年8月から現在迄の15年間、旭川医科大学内科学第二講座を担当し、平成9年8月から6年間は病院長をさせて頂きました。この間、皆様には大変お世話になりましたが、ここに任務を満了して退官する事になりました。これはひとえに学長先生はじめ教授会の先生方、大学ならびに病院職員の皆様方から賜りました多大なご支援、ご協力、ご指導のお陰であり、ここに厚くお礼申し上げます。

この15年間で世の中は急速に変わり、大学も病院もそれをとり巻く環境が激変しました。とりわけ病院長在任中は時代を反映して数々の問題に遭遇致しましたが、その内でも平成11年度から開始されている病院再開発は大事業でした。現在は1期工事(新東病棟増築、検査部および材料部新築)、2期工事(旧東病棟改築、手術室改築)が終了し、3期工事(西病棟改築)が着手寸前にありますが、これが終了すると診療体制は臓器別に移行します。この再開発事業はこのところの経済不況により他大学では完全凍結されておりまして極めて幸運でした。本事業は平成17年度まで続く予定ですが、これからも順調に推移することを願っております。

時を同じくして大学病院の経営改善が強く叫ばれましたので、私はそれらの対応策として院内組織を見直し、特に、中央診療部として経営企画部、総合診療部、周産母子センターなどを立ち上げて経営基盤の強化を計りました。今後はこれらによる成果が待たれるところですが、来年4月から大学は法人化されますので、病院の経営改善には一層の工夫と努力が求められると思います。また、大学病院における医療事故が社会問題になりましたので、事故防止対策のため、医療安全管理部を設置しましたが、幸い順調に機能しておりますの

で、私共の病院が医療事故のもっとも少ない病院として全国的に評価されている事は嬉しい事です。どうか皆様には今後とも医療事故防止に特段の注意をお願い申し上げます。

私は病院長の在任中、旭川医大病院が21世紀に相応しい病院となるようハード面の整備に努めてまいりましたが、これからはソフト面の運営を如何に行うかが課題となります。職員の皆様方には全員が一枚岩となって協力され、旭川医大病院が地域住民に開かれた病院として大きく発展されますことを願って居ります。

一方、私が15年間、担当した第二内科教室ですが、当科の担当領域は広範囲ですので、4グループ(肝臓、膵臓、糖尿病、内分泌・膠原病・神経)を組織し、教室の運営にあたってまいりました。

教室員は各チーフを中心に活躍し、着実に成果を挙げておりますことを私は頼もしく思っております。しかし、最近は大学病院の体制変化に伴い日常業務量が急増し、教室員全員は多忙を極めておりますが、その中であって諸問題を積極的に処理している姿にはチームワークの良さを感じます。

特にマンモス学会である日本消化器病学会の第88回総会(平成14年4月)を地元の旭川において盛会裡に終える事が出来たことは感銘深いものがあり、私は有能な素晴らしい教室員に恵まれた事を感謝しております。そして私は教室の運営方針として、教室員には「医学の進歩に対する自らの向上心」と「医師としての平常心(モラル)」を持ち合わせる事をくり返しお願いしてまいりましたが、今後もそれを持ち続けてほしいと願って居ります。

長い間、大変お世話になりました。誠に有難うございました。



副学長に就任して

副学長 塩野 寛

この度、8月1日付で教育・研究及び厚生補導担当の副学長に就任しました。来年4月より大学が独立法人化を向かえる一方、6年間の中期目標・中期計画をたて生き残りをかけた重大な時期での就任にその責任の重さを痛感しているところです。

他方では名義貸し、医局への賛助金など大学の医局とお金の透明性をもとめた世間からの大きな流れが、大学内に調査委員会を設置して事実関係を明らかにするという時期にもぶつかりました。毎日、目先のことで時間が過ぎていっています。

今年、設立30周年を迎える旭川医大の使命は、地域社会の要請に即した医学・医療に携わる人材を育てること、医学・看護学の研究を推進すること、そして第一線の先端医療を行うことです。これらを総括、推進する学長を補佐し、効果的な組織運営を大いに進めようと考えています。

本学の教育理念には、「1) 医療の質を向上させ地域医療問題を解決することにより社会に貢献し、患者の苦しみを理解しその改善に最善の努力を尽くす高度な実践的臨床能力を有し、患者の人権、生命の尊厳、QOL等に高い生倫理観を有する良い医師及び看護職者を育成する。2) 医学・看護学に関する最先端の高度な研究を行うための豊かな人間性と幅広い学問的視野を持つ優れた研究・医療実践者の養成に努める。3) 医学・看護学の教育・研究及び医療活動を通して国際社会との連携を深めその発展に貢献する。」と掲げている。平成10年以來、医学科・看護学科とも「病める者を思いや

る医療人としての倫理観と地域の医療事情を理解し、地域医療に貢献する資質を身につけるため、教育カリキュラムを全面的に見直し、1年目からの早期体験実習、2段階チュートリアル教育、統合カリキュラム、臨床実習コアカリキュラム及びクリニカルクラークシップ、OSCE（客観的臨床能力試験）、スキルズ・ラボラトリーの充実、僻地医療実習の必修化など学生の積極参加型講義・実習を中心に改革を進めてきた。

多彩な学生の人材を獲得するため、入学選抜方法を前・後期試験以外に推薦入学、AO入試、学士入学を現在行っている。多様な能力をもつ優秀な学生間で切磋琢磨し、視野の広い人間性豊かな学士が多く生まれ、国内外で活躍する環境作りが教育担当副学長の責務と考えている。関係各所の御支援をよろしく願いたい。





副学長(附属病院長)就任の御挨拶

副学長(病院長) 石川 睦 男

1977年8月、旭川医科大学に助手として赴任以来、本学にお世話になって27年目に入りました。1967年北海道大学医学部を卒業しましたが、当時は、インターン紛争の真最中でした。卒業後1年間、それまでのインターン制度ではなく、自分で自主的に作成したプログラムで実地修練を行ないました。インターン制度はその年で廃止になりました。臨床系の大学院も全員がボイコットしておりましたので、1968年北大産婦人科に入局した私は、研究面では、臨床の傍ら、北大応用電気研究所に通い、学位取得までに6年かかりました。

その後WHOの研究者として、ニューヨークのロックフェラー大学にあるポピュレーションカウンセルにて子宮収縮に関する内分泌学的研究をしました。1977年帰国後旭川医科大学に参りました。1期生が5年生の時です。当時は人も物もない、ただ若さと希望だけは漲る教室で、清水哲也教授(元学長)を頭に全員が一つの家族のように力を合わせて頑張ったことを懐かしく思い出します。1983年、産婦人科学教室の協力を得て、ニューヨークでコーネル大学の産婦人科の客員助教授として研究、引き続きヘルシンキ大学で客員教授として臨床に従事致しました。この留学した期間を除くすべての時間を旭川医科大学で過ごしたわけです。

私のこれまでの産婦人科医としての研究、臨床および教育に関しまして簡単に述べます。

- (1) 活性酸素 消去酵素の卵巣癌の発現さらに、黄体機能の局所調節因子として、黄体形成退縮に関与していることを明らかにした。
- (2) 不妊治療の体外受精、顕微受精などの生殖補助技術に先進的に取り組み、日本でトップクラスの成績をあげて来た。現在は、厚生労働省と、北海道から指定された不妊相談センターとして、本州からも不妊相談を受けている。また、精子形成に重要とされているY染色体以外に初めて無精子症の原因遺伝子SYP3を同定した。

- (3) 婦人科癌治療では低侵襲外科手術を目指し積極的に内視鏡手術を導入しており、道内では有数の症例数を有するまでに至っている。
- (4) 周産期医療において厚生科学研究班において本邦の妊産婦死亡の調査、分析を行い、その対策を提言した。
- (5) 教育面では教育課程編成小委員会において、コアカリキュラムに基づいたクリニカルクラークシップを含めたコア臨床実習などの新、新々カリキュラムの策定に携わった。

『旭川医大病院ニュース』第85号でも述べましたが、私は大学病院の使命は医学教育とEBMに裏付けされた高度先進医療の展開、さらに卒前、卒後の臨床教育であると思っています。また、医療の質については、最も重要なものは、安全性であると思っています。医療担当の副学長ということで、病院長として、病院の運営面にも責任があります。旭川医大病院の目標として、中長期計画とマネージメント改革にもられた3つの目標、医療の質の向上、病院運営の改善と効率化につきましては、医大病院ニュースに詳しく述べました。3つめの医療従事者の教育の充実につきましては、入学当初のアーリーエクスポージャー、コア臨床実習に対応するクリニカルクラークシップ教育の充実が重要であると思います。卒後教育においては、明年から卒後臨床研修が義務化されます。歴史は繰り返すと言いますが、奇しくも2度の医学教育の大きな転換期に直面することになるうとは、思っても見ないことでありました。

卒後教育については、卒後研修センターの機能を強化することにより、研修プログラムを魅力的で充実したものにし、本学はもとより広く他大学出身の研修医の集まる研修病院を目指します。

問題山積を実感するこの頃ですが、自分自身の経験を踏まえ、旭川医科大学の発展と充実に医療担当の副学長として、全力を尽くすつもりであります。皆様の御協力と御鞭撻をよろしくお願い申し上げます。



図書館長就任あいさつ

病理学第一講座 教授 小川 勝 洋

この度、旭川医大附属図書館長を拝命いたしました。

図書館には、研究推進の支援、学生教育の支援、地域住民の生涯学習の支援などさまざまな使命がありますが、それぞれの利用者の方々にとって図書館が利用しやすいものでありますように努めていきたいと思っております。

研究する者の立場でいうと、図書館の機能はここ数年で大きく変わりました。その最も大きな理由はインターネットの普及と電子ジャーナルの普及によると思います。以前の図書館は蔵書を揃えた情報バンクとしての機能が主でしたが、現在では情報バンクを大学の外に想定し、利用者に効率良く必要な情報を提供するための中継所としての働きに変わってきたと思います。おそらく、この傾向は今後もますます強くなるものと思います。

私自身の図書館の利用の仕方をご紹介させていただきますと、以前とはずいぶん変わりました。以前は時間がある時に新着ジャーナルのテーブルから自分の研究分野に関係あるジャーナルをめくって必要なものをコピーしたり、論文の文献欄から必要なものをコピーし、その中からさらに孫引きしていくといった具合にして必要文献を集めていましたが、そのようなことは今はほとんどしなくなりました。われわれの分野に関係ある新着ジャーナルは現在ではほとんどオンラインで見ることが出来ますから、わざわざ図書館に行くことはありません。また、何かを調べる時はまず自分の机の上のノートパソコンでPub-MedかTelnetの画面を開き、キーワードを打ち込みます。探すものが限られている時にはきつい検索をかけますし、広く探す時には緩い検索をかけて多数の情報の中から関係ありそうのものをを見つけ、アブストラクトを開いて斜め読みし、必要ならそれを印刷します。また、何かについて全体的に知りたい時にはキーワードのほかにreviewと打ち込んで最新の総説を

捜します。目的に応じて検索のかけ方を変えるようにしていますが、それによって必要な情報を入力する効率がずいぶんちがいます。

次に印刷したアブストラクトを秘書の方に渡してPDFファイルを印刷してもらいます。まずPubMedから直接PDFファイルが取れるかどうかを試しますが、実際かなりの数、取ることが出来ます。もしだめなら次に図書館のホームページに行きそこから取れるかどうか試します。A-Zまでのジャーナルリストの中になくてもScience DirectやHighWire Pressなどのサイトから入って取れるものもあるのでそれらを試します。それでもだめなものは図書館で冊子体で購入しているものであればコピーをとってきてもらいますし、なければ学外からコピーを取り寄せる手続きをしてもらいます。学外文献は現在国内の大学に依頼しておりますが、これからはアメリカ合衆国の大学にもコピーの依頼をできるよう手続きをする予定で、手数料はやや高くなりますが時間的には早くなるようです。

今や学内ではマイパソコン＝図書館という夢のような時代で、図書館の利用に関してずいぶん便利になったものだと思います。しかし、図書館の運営には膨大な費用がかかっています。そのうちの最も大きいのは外国雑誌の購入費で、しかもその額は毎年、前年度の10%ずつ高騰しています。残念ながら図書館予算は毎年ほとんど決まっていますので図書館サービスは、学内のニーズの高いものを優先せざるをえません。それでも、コストパフォーマンスを考えると利用頻度が高いほど割安になります。パソコンが苦手な方には図書館職員が出前で利用法を教授するようなサービスも検討しておりますので、大いに図書館を利用させていただきたいと思っております。どうぞ、よろしくおねがいいたします。



就任ご挨拶

看護学講座 教授 服部 ユカリ

私は、本年4月1日山形大学地域看護学講座の教授から、本学の看護学講座の老年看護学担当の教授として赴任して参りました。地域看護学から老年看護学?と不審にお思いになる方もおられるかと存じます。その理由を述べることで就任のご挨拶とさせていただきますと思います。これは私の研究テーマと職歴に関係しています。私は学生時代、恩師が痴呆性高齢者(当時はこのような表現ではなく“呆け老人”という表現しかありませんでしたけれど)のご家族の電話相談に根気よく応じておられたこと、家族会での確かな助言をされていたことなどを、間近に見ることによって、自分も在宅で痴呆症や脳血管疾患の後遺症など障害を持ちながら生活している高齢者とそのご家族に役立つ看護と研究をしたいと思うに至りました。

しかし、当時老年看護学という科目はなく、成人看護学の一部とされており、まだ、日本の看護界では高齢者の看護については、あまり注目されていませんでした。また、当時の高齢者が置かれていた社会状況を振り返ると、痴呆症や寝たきりの高齢者の問題は顕在化しつつある状況でしたが、高齢者が入所・入居できる施設は現在より種類も数も少なく、また、わずかな在宅サービスにも救貧的色合いが強く、利用に制限がありました。

そのような中で私は、とにかく在宅の障害高齢者の看護ができることとと思い、先駆的に訪問看護を実施していた病院に就職しました。まだ、訪問看護に何の報酬も与えられない時期でした。病棟勤務を経た後、訪問看護部門に異動しました。そこで、往診に同行したり訪問看護をするうちに、一つの病院だけでは解決できない問題を抱えている障害高齢者のご家族が多いことに気づかされ、次第に近くの病院のソーシャルワーカーや、市の

福祉担当者、保健師などと交流を持つようになり、地域での病院も含めた連携の重要性とその困難さを知ることができました。

その後も在宅の障害高齢者とそのご家族に関わっているうちに、老年看護学の教育・研究の道にはいることになりました。また、前任地から地域看護学を担当するようになるとお話があったときは、迷いながらも地域看護学の在宅ケアを中心とした領域なら、なんとか職責を果たせるであろうと思い、また少し異なった視点から老年看護学を見てみるのにも良い機会だと思い、お引き受けした次第でした。確かに、地域という広い視点で高齢者の健康の維持・増進や障害高齢者への対策など得ることは多々ありました。

しかし、何年か、地域看護学の視点で障害高齢者のご家族をとらえていることに、隔靴搔痒の感をおぼえ、老年看護学をやりたいという思いが抑えがたくなりました。そんな時、誠に幸いにも本学に就任させていただき、老年看護学の研究・教育ができ、充実した日々を送ることができ、感謝しております。

今後は、感性与知性と豊かな人間性を自ら高めていけるような学生の教育に励みたいと思います。

研究は、在宅障害高齢者とそのご家族への支援に関わるテーマを中心に続けますが、寒冷地というファクターが関連しているかどうかなども興味深いところです。

また、地域の在宅ケアや高齢者の入所施設での看護と介護のいっそうの質の向上に微力ながら関わっていければと思っています。

まだまだ未熟者でございます、今後ともご指導、ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

助教授紹介



救急医学講座 藤田 智
出身大学：札幌医科大学

昨年4月から皆様にはたいへんお世話になって
います。思えば、医者になってはじめて出張した
のが旭川赤十字病院、その後通算5年間仕事をさ
せてもらったのが市立旭川病院、二人の子供が生
まれたのも旭川、実験(虚血心筋)のお世話になっ
たのも旭川医大薬理と、医者になってからは不
思議と旭川に縁がある生活をしてきたように思いま
す。多くの出張先でICU、救急関係の仕事を主に
させてもらってきましたので、それが旭川医大で
お役に立てばと考えています。よろしくお願いま
す。



放射線医学講座 秀毛 範至
出身大学：金沢大学

私は、昭和60年に金沢大学を卒業後、同大学核
医学教室に入局し、以来、核医学(特に放射性ト
レーサの体内動態解析による臓器血流、機能の
数値化とその臨床応用)を専門にしています。平成
6年に本学放射線科の所属となりましたが、この
9年間、公私を通じて非常に良い環境の中で仕事
をさせて頂き、お世話になりました本学職員の皆
様には大変感謝しております。微力ながら、今後
も診療、研究に努力していく所存でございます
ので、どうぞよろしくお願いいたします。



物理学 本問 龍也
出身大学：北海道大学

平成15年4月1日付けで本学助教授へと昇任さ
せて頂きました。平成5年3月に北海道大学で博
士の学位を取得後、同年4月1日に本学講師とし
て採用されて以来ちょうど10年目です。その間、
一般教育はもとより基礎・臨床並びに看護学科の
諸先生方に折に触れご指導賜りました。この場を
お借りしてお礼申し上げます。来年度から国立大
学が独立行政法人へと変わります。この新しい枠
組みの中で学生にとって最善の教育方法を模索し
ながら今後も頑張る所存です。よろしくお願いま
す。



卒業生の動向（医学科）

去る3月25日（火）に本学を卒業した92名の
勤務（連絡）先は次のとおりです。

卒業生の動向（看護学科）

去る3月25日（火）に本学を卒業した65名の勤務（連絡）先は次のとおりです。

日本学生陸上競技 対校選手権大会

7月5日（土）に横浜国際総合競技場にて第72回日本学生陸上競技対校選手権大会（日本学生陸上競技連合主催）が行われ、男子3000m障害個人戦において本学医学科第3学年 榊原 学君が、第6位（8分58秒52）の成績を納めました。



お二人の健闘をたたえると共に、皆さんにお知らせします。

（学生課）

全国かるた競技 学生選手権大会準優勝

8月23日（土）に東京都江戸川スポーツセンターにて第65回全国かるた競技学生選手権大会（全日本かるた協会主催）が行われ、A級（4段以上）の部で本学医学科第2学年 田原大地君が、準優勝に輝きました。

クリニカルクラークシップを少し経験してみても



医学科第5学年 箭原希実

私は今まで外科系の科しか回っていないので、偏った意見になるかもしれませんが、私は新しいカリキュラムになってよかったと思っていることが2点あります（先生方からは前のカリキュラムとあまり変わらないよと言われますが...）。1点は患者さんを担当し、カルテ書きができるという点です。なにか自分に責任感が生まれ、患者さんの状態を正確に知るため、お話を何度も聞きにいきました。またカルテは公的文章であるため、間違った事は書けないといろんな文献を調べたり、先生方に聞いたり、先生方の治療方針にすばやく聞き耳をたてたりしました。これで、『やるだけのことは、したかも』という自分の達成感が得られ、自信につながりました。もう一点は、新カリの説明をしてくださった先生方から「参加型といわれるくらいだから、（指導医に迷惑がかからない程度に）積極的に行動しなさい」と何度も強く言われたため、自分でも信じられないほど積極的になれたことです。

さらに、新カリのなかで患者の気持ちを理解できるように、医療行為をもっと体験したいです。つまり、自分が被検者として経験をしたいということです。例えば、麻酔科実習で笑気を吸った後、私の様子がどうだったかを友人のY君に聞くと、Y君は下を向きながら口に手を添えて「くっ！」と小さく笑いながら「ヤハラさんが一番イカレテタ」と言いました。私は顔がカーッと熱くなり、穴があったら入りたいような気持ちになりました。でもこの体験から、笑気を吸うとどんな感じがするかだけでなく、自分の意識できない間の行動を他人に見られることの恥ずかしさを知ることができ、私にとっていい経験だったと思います。笑気をかけられた時の患者さんの気持ちがわかったからです。やはり、百聞は一見にしかずです。

最後に、ご指導くださった先生方、暖かく見守ってくれた患者さん、協力してくださった医療スタッフに感謝します。

学生等のセクシュアル・ハラスメント相談員が決定

学生等のセクシュアル・ハラスメントの相談への対応に関する要項の改正に伴い、次の方々が相談員に決まりました。

任期は平成17年3月31日までです。

- | | | | | | |
|-------|-----|----|-----|-----------|--------|
| ○一般教育 | 教授 | 林 | 要喜知 | ○保健管理センター | |
| ○基礎医学 | 助教授 | 清水 | 恵子 | 講師 | 武井 明 |
| ○臨床医学 | 助教授 | 伊藤 | 浩 | 保健師 | 藤尾 美登世 |
| ○看護学科 | 教授 | 松浦 | 和代 | | |
| | 教授 | 服部 | ユカリ | | |
| | 講師 | 升田 | 由美子 | | |

(学生課)

広報誌「かぐらおか」が本学のホームページに

旭川医科大学ホームページに広報誌「かぐらおか」が掲載されました。

トップページの「学生課の項目 お知らせ、研究生の次に広報誌「かぐらおか」の項目が加わりました。第113号から始めましたが、順次追加して最新号までの4号分を載せる予定です。(学生課)

1/2 ページ


[English]

- ▶学内E-Mail
Eメールの配信、転送等もできます
- ▶お知らせ (12/30 更新)
- ▶学会・講演会等の開催情報
▶学会・研究会・シンポジウム等の予定一覧
▶地域貢献推進委員会対象とした講演会・研究会の予定一覧
▶地域生活者対象とした講演会・研究会の予定一覧
- ▶派遣講座 (11/15更新)
- ▶旭川医科大学研究フォーラム
- ▶更新状況

- ▶大学概要 (10/10更新)
- ▶大学案内
- ▶入試情報
- ▶行政文書
- ▶教官公募
国立保健学研究所へのリンクもあります
- ▶学生生活
▶医科フェスタホームページ
- ▶位置・交通機関

- ▶事務局
- ▶医学科(基礎医学)
- ▶医学科(臨床医学)
- ▶看護学科
- ▶一般教育等

- ▶附属図書館
- ▶附属病院
- ▶動物実験施設
- ▶実験実習機器センター
- ▶放射性同位元素研究施設



旭川医科大学
Asahikawa Medical College

トピックス

- 平成15年09月01日 平成16年度研修医募集について(第4回採用試験)
- 平成15年08月12日 平成16年度大学院医学研究科修士課程(看護学専攻)学生募集要項
- 平成15年07月30日 平成16年度看護職員募集について
- 平成15年07月15日 平成16年度入学者選抜要項
- 平成15年07月09日 平成16年度医学部看護学科第3年次編入学
- 平成14年09月10日 平成14年度概要

各種情報

旭川医科大学案内2002 発行。
旭川医科大学大附属病院治験支
旭川保健学研究所・センター・基幹センター
発行部。

クリックした
情報に移動します。

- 庶務課
- ▶学内限定利用
- ▶点検評価
- ▶国立大学法人法案等

- 附属病院
- ▶お知らせ
- ▶病院ニュース
- ▶病院ボランティア

- 附属図書館
- ▶お知らせ

- 動物実験施設
- ▶施設の紹介
- ▶情報処理センター
- ▶新着情報
- ▶停止案内

- 学生課
- ▶お知らせ
- ▶研究生
- ▶[広報誌「かぐらおか」](#) ←ここをクリックして下さい

「医大祭を終えて」

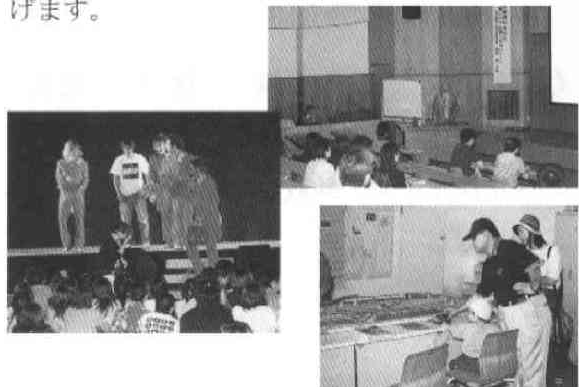
医大祭実行委員会実行委員長 松森 友昭

今年の医大祭2003「試される大学」の実行委員長をさせていただいた松森友昭です。今年の医大祭を思い返し振り返ってみると、医大祭の実行方法などの知識が全く無いところからのスタートでしたし、戸惑う事もたくさんありました。そしてもちろん一年に一度しかない、規模の大きなイベントですのでさまざまな問題があらゆるところで生じました。しかし問題が生じた時は実行委員・大学関係者の皆さんが惜しむことなく協力してくれたことによって無事に問題解決をできた事が多々ありました。そのような協力があつたからこそ今年の医大祭は多くの人々が足を運んでくれましたし、医大祭開催において旭川市近隣住民のみなさんの協力を得ることもできました。実行委員長をしていた私としては今年の医大祭は成功したと思いますし、とても満足のいく結果でありました。

今年の医大祭開催の準備において私達は医大内の友人や医師の先生方はもちろん、パンフレットの広告協賛ご協力のお願いや医大祭の宣伝などを通して大学内・外の普段の学生生活では

触れ合う事のできない人々や社会にも触れる事ができ、とても多くのことを体験し学ばせていただきました。こういう経験・知識というのは学業では得ることができないものでありますが、将来立派な医師となる上で勉学と共にとっても大事なものだと思います。とても辛い出来事もありましたが、こういった大切な、そして得難い経験をさせてくれた医大祭に私は感謝しています。

最後になりましたが、今年度の医大祭2003「試される大学」を開催するにあたり、我々の試みを快く支援して下さいました大学関係者の方々、広告・協賛という形で御協力頂いた方々、そしてご来場頂いた全ての皆様に心より御礼申し上げます。



SARS対策講演会等の開催

6月10日に院内感染対策委員会主催で教職員・学生を対象に緊急SARS対策セミナーとして「SARSウィルスについて」（講師微生物学講座教授若宮伸隆）「SARSの予防と対応の実際」

（講師第一内科講師大崎能伸）が開催されました。また、同教授による連続講演として6月14日に医大祭実行委員会主催で一般市民を対象に公開講座として「身に迫る危険!!重症急性呼吸器症候群（SARS）について」、6月27日には保健管理センター主催で全学年学生を対象に「重症急性呼吸器症候群（SARS）の現状とその予防について」の特別講演を開催し、参加した学生、教職員、市民に、SARS対策に関する最新

情報（発症の特徴、症状、予防策、治療、問題、検査）について周知、徹底を図りました。

（学生課）



課外活動用の製氷器が設置されました

福利厚生棟1階（売店前自販機、ウォータークーラー横）に製氷器が設置されました。

一度に多量に使ったりせず、各クラブ等で譲りあって使用しましょう。

また、2階保健管理センターの製氷器は緊急時に必要なもので、出来るだけ使用しないでください。

（学生課）



博士学位記授与式

平成15年度博士学位記授与式が、6月30日（月）午前10時から第2会議室において行われ、次の9名が医学博士の学位を授与されました。（学生課）

課程博士	浅井 真人	生体情報調節系
	羽廣 敦也	細胞・器官系
	及川 賢輔	生体情報調節系
	有倉 潤	生体情報調節系
論文博士	飯田 康人・三浦 貴徳	
	前本 篤男・川合 重久	
	大坪 誠治	



更衣ロッカー室を物置にしないで

私はロッカーです。学生の皆さんの私物や実習のための白衣、寒いときのコート等を預かって皆さんの役に立とうと思っています。中が4つに仕切られているので、私1台で4人分のお世話ができます。平べったい顔ですが、仲間と勢ぞろいをして、かっこよく立っています。そんな私のところへ使用主がやってきました。

夏の部活で疲れたのでしょうか、飲み物を手にしています。私の上に置いて、持ち物を出し入れしています。飲み終わって元気になったようですが、空の容器は私の上。私は自分では動けません。頭の上に物を乗せられてもどうにもできません。さらに足元にまで物を置かれました。いつになっても誰も持ってってくれません。タスケテ。

放置物品だらけだった更衣ロッカー室を片付けた日の夜に、こんな夢を見ました。

いらなくなった物や空の容器はごみ箱へ、きれいなロッカー室にして気持ちよく利用しましょう。また、何か不都合があったり番号札がなくなったりしたときには、遠慮なく学生課に申し出てください。（学生課）

患者さんのための音楽による医大祭

室内合奏団によるロビーコンサートが6月14日（土）15時から附属病院正面玄関ロビーにて開催され、間近にしながら医大祭を見に来られない入院患者さん達のために、弦楽コンサートが届けられました。

日頃の成果を見てもらうため、何度かメンバーが入れ替わり、その都度ジャンルも変えての演奏に、ほぼ満席の会場は惜しめない拍手を送っていました。

（学生課）



外国人留学生夏季オリエンテーション

平成15年8月29日(金)に外国人留学生夏季オリエンテーション及び交流会が実施され、在籍留学生10人中6人とその家族6人及び教職員が参加しました。

北海道の大自然を見てもらおうと、大雪山連

峰の旭岳のふもと、姿見の池めぐりを企画しました。しかし、曇りからあいにくの雨となり、周りの身近な景色だけと、北海道の大自然の厳しさを覚えることとなってしまいました。

(学生課)



第50回北海道地区大学体育大会

第50回北海道地区大学体育大会は、北海道大学が当番校となり7月4日(金)～21日(月)の10日間、道内の各国公私立40大学46単位大学から約4,300名の学生が参加し、北海道大学を主会場として札幌国際大学、北星学園大学、酪農学園大学の協力と共に札幌市、江別市の15会場で行われました。

本学からは15種目に約200名が参加しました。

ソフトテニス(男子)が準優勝を飾り、総合成績は男子が8位、女子が12位でした。

また、陸上競技個人で400m(男子)に医学科4年の長尾知行君が3位、1,500m(男子)に医学科3年の榊原 学君が優勝、男子走高跳に看護学科2年の原谷俊治君が準優勝、800m(女子)に医学科3年の野崎綾子さんが第6位の成績を収めました。(学生課)

種目	順位	優 勝	準 優 勝	旭川医大
総 合	男	北 大	小樽商大	8 位
	女	旭 教 大	札 教 大	12 位
陸上競技	男	酪農学園	旭 教 大	7 位
	女	札 教 大	旭 教 大	11 位
硬式野球		旭東海大	旭 教 大	
準硬式野球		小樽商大	北 大	ベスト8
ソフトテニス	男	北 大	旭 医 大	準優勝
	女	北 大	札 教 大	
バスケットボール	男	酪農学園	北 大	ベスト8
	女	札 教 大	旭 教 大	
バレーボール	男	北 大	旭 教 大	ベスト8
	女	旭 教 大	武蔵短大	ベスト8
サッカー		岩 教 大	北 大	ベスト8
卓 球		札 教 大	北 大	
バドミントン	男	北 大	旭 教 大	ベスト8
	女	旭 教 大	北星学園	
柔 道		道 都 大	道 工 大	
剣 道	男	釧 公 大	酪農学園	
	女	苫 駒 澤 大	釧 教 大	
弓 道	男	北 大	道 工 大	9 位
	女	北星学園	小樽商大	4 位
ハンドボール		小樽商大	道 都 大	

第46回東日本医科学生総合体育大会

第46回東日本医科学生総合体育大会（夏季大会）は、7月28日（月）～8月15日（金）まで山梨大学医学部、東邦大学医学部、東京医科大学、慶應義塾大学医学部が主管となって行なわれました。

本学からは30種目に約300名が参加しました。

今大会は、ゴルフ(女子) 優勝
バレーボール(男子) 準優勝
バドミントン(男子) 準優勝
バスケットボール(男子) 準優勝
弓道 準優勝

の活躍ぶりで、総合5位となりました。

また、陸上競技個人で400m(男子)に医学科4年の長尾知行君が準優勝、800m(女子)に医学科3年の野崎綾子さんが第8位の成績を収めました。(学生課)

本学参加分

種目	順位	優勝	準優勝	旭川医大
総合	男女部門	筑波大	慶應大 東京女子医大 東北大	5位
	女子部門	東京女子医大	山形大	
陸上競技	男	慶應大	新潟大	
	女	東北大	東京女子医大	
準硬式野球		札幌医大 弘前道大 北海道大 山梨大		5位
テニス	男	東京医大	東京大	
	女	東京女子医大	弘前大	
ソフトテニス	男	東北大	自治医大	4位
	女	東京女子医大	獨協医大	
卓球	男	筑波大	東北大	8位
	女	群馬大	北里大	
バレーボール	男	札幌医大	旭川医大	準優勝
	女	千葉大	群馬大	5位
バドミントン	男	山梨大	旭川医大	準優勝
	女	山形大	信州大	
サッカー		東北大	東京医大	
バスケットボール	男	北海道大	旭川医大	準優勝
	女	北里大	東京女子医大	
柔道		岩手医大	防衛医大	
剣道		東京医大	防衛医大	(女子団体位)
弓道		新潟大	旭川医大	準優勝
水泳	男	千葉大	慈恵医大	
	女	東京女子医大	埼玉医大	
ゴルフ	男	慶應大	慈恵医大	
	女	旭川医大	慶應大	優勝
ハンドボール		筑波大	慈恵医大	12位
ラグビー		弘前大	慈恵医大	
空手道	男	組手	弘前大	札幌医大
		組手	弘前大	防衛医大
	女	組手	自治医大	山梨大
		組手	山形大	防衛医大

クラブ今昔 (旭川医大女子バスケットボール部)

女子部-キャプテン 澁谷英子

私たち旭川医大女子バスケットボール部は、顧問の精神医学講座千葉茂教授、そしてたくさんOB・OGの方々に支えられ、現在週3回活動しています。

昨年から部員数がかなり減り、現在は少人数で練習をしています。しかし、人数が少ないためゲーム形式の練習などはなかなかできず、男子バスケ部のみんなに練習相手になってもらったり、他校生に合同練習をお願いするなどしています。

女子バスケ部は今年度2人の新入生を迎え、部員計7人(うち1名マネージャー)が5月に秋田県で開かれた北日本医科学生バスケットボール大会に参加しました。結果は3勝1敗、総合5位(下位リーグ1位)という成績でした。この大会では1年生2人が新人賞をとり、2年生1名が得点王を獲得するなど、上位リーグ優勝は

果たせなかったものの、個人として力を発揮できた選手が多かったと思います。その後、医学科の部員が足りず、8月に行われた東日本医科学生総合体育大会(東医体)には残念ながら出場できませんでした。

私達の部は小・中・高とバスケットボールの経験のある部員から、大学に入るまでバスケットボールの経験のない初心者まで様々です。そのため学年を問わず技術を高めるためにプレーを教え合い、支え合いながら活動しています。バスケットボールという一つのスポーツを中心に集まったみんなが、楽しい思い出やつらい思い出を分かち合い、人間関係を築いていくことを私は大変すばらしく思っています。私達の活動を支えて下さっているOB・OGの方々の伝統を忘れず、またそれを引き継いでいけるよう、常にバスケットボールをみんなで楽しみながら練習に励みたいと思います。



研究室紹介

救急医学講座の現況

救急医学講座教授 郷 一知

昨年12月から旭川医大の救急医学講座を預かることになりましてから半年以上になりました。

旭川医大救急部の現在の体制をご紹介します。救急医学講座には教授のほかに札幌医大麻酔科出身で救急の分野でも経験の豊富な藤田助教授、旭川医大出身で小児の循環器専門の津田助手がおります。集中治療部所属の藤本講師、上田助手、高橋助手（それぞれ麻酔科、一般外科、循環器内科出身）と一緒に救急を担当しています。その他に、内科から二人、外科、整形外科、脳神経外科、そして麻酔科から一人ずつ総勢12人で当直を含めた24時間の救急体制をとっています。学内の各臨床科の医師には救急専用のPHSを1台ずつ持ってもらい、いつでも専門医の診察が可能な救急体制となりました。どの科も連絡するとすぐ救急外来に駆けつけてくれ、迅速な対応が可能です。

藤田助教授を中心としたスタッフの活躍で、市内や旭川周辺の救急隊との連携も良好となりつつあり、救急車による患者さんの搬入も増加しつつあります。また、BLSの講習会

の開催も回を重ねるようになり、ACLS講習会の開催も予定しつつあります。

しかし、救急病床の確保、旭川市内の二次救急への参加、救急部としての患者さんの登録、医師と看護師の確保等、今後解決しなければならない問題も少なくないため、尚一層の努力と皆様の協力が必要です。

カリキュラム変更によって5学年も臨床実習をするようになり、実習内容を充実できるよう努力しています。来年からは卒後臨床研修の医師も加わりますので、卒業したらすぐ戦力になってもらえるような教育を今のうちからしていきたいと思っています。

大学にいて一番嬉しいことは、毎年多くの新しい学生の皆さんや研修医の皆さんに接することができることです。いつの日か、私共が何気なく言った言葉が若い誰かの胸の中に残るようなことがあれば望外の幸せと思っています。



全日本医科学学生体育大会 バスケットボール

昨年の東医体で悲願の優勝を果たした男子バスケットボール部が当番となって、全医体のバスケットボールが8月13日～15日まで、旭川市総合体育館にて行われました。

写真は順天堂大との試合
(学生課)



教官の異動

辞職	H15. 6. 15	第二外科	講師	柿坂明俊
"	H15. 6. 30	小児科学講座	助教授	沖潤一
昇任	H15. 7. 1	周産母子センター	助教授	田熊直之
"	H15. 7. 1	小児科	講師	中江淳
"	H15. 7. 1	放射線科	講師	山田有則
"	H15. 7. 1	周産母子センター	講師	林時伸
"	H15. 7. 16	第二外科	講師	小原充裕
"	H15. 8. 1	英語	助教授	内藤永
転入	H15. 10. 1	アドミッションセンター	助教授	大谷奨



窓外

放射線医学講座
助手 長沢研一

改革

最近、会議に出席する機会が多い。大抵、会議の出席者は各科、各部門の重要な役職、中心となっておられる諸先輩方ばかりであり、私のような若造はまずいない。そういうわけで、会議ではいつも居場所がなく、小さくなり事の成り行きをみている。それはさておき、会議の中身をみていると、研修義務化に伴う卒後臨床研修、全国統一OSCI、チュートリアル、電子カルテ、病院の再開発などであり、また6月からの包括医療の導入、来春からの独立行政法人化の話題も日頃よりあり、まさに改革期であることを感じずにはいられない。

会議に参加して感じることは、ありきたりだが改革というのは非常に困難な作業であるということである。大学、大学病院という大きな組織では

関わる部門が多く、意見調整といってもたやすくはない。ほとんどの人は協力的だが、稀にそんなことはやりたくないといった意見も聞かれる。また、我々は医療およびそれぞれの診療の専門家であり、これら経営等に関しては決して詳しいとは言いがたい。まとめる方々の苦勞は並大抵のものではないと推測できる。

この原稿の執筆中、自民党総裁選が行われている。結果は現在でていないが、おそらく小泉純一郎氏が勝つといわれている。構造改革、構造改革とここ数年叫び続けている小泉首相だが実際のところ遅々として構造改革は進んでいないように見える（大学の独立行政法人化は実施されたが）。利権を持つ抵抗勢力や官僚の抵抗は予想以上に強いようで、政官業の癒着は解消されず、そのうち日本がつぶれるのではとまで思ってしまう。

後戻りのできない変革の今、我が大学では諸先輩のご尽力のおかげで、比較的順調に進行しているように見える。抵抗勢力というものはないと思うが、一連の改革の中、よりよい旭川医科大学、附属病院となることを期待する。あり得ないと思うが改革の波にのまれ、十年後に自分の母校、その附属病院がなくなるのではちょっと寂しい。